

## 世界の凋落を見つめて

世界は凋落している。間違はなく凋落のさなかにある。

暴力と不寛容が跳梁し、動機も定かでない大量殺人が平然と生起する。人々は差別され監視される。耐えかねて逃亡を図ると、監禁され排除される。テロと疫病は場所を選ばない。地上の誰もが犠牲者となる可能性のもとにある。空間の安全性をめぐって、これまでのように「こことよそ」という分割はもはや成立しない。いたるところが「ここ」になってしまったのだ。

真実というものの輪郭が曖昧となってしまうた。情報の出所が問われることなく、一瞬のうちに世界を駆けめぐっている。虚偽の言説と映像が大量に拡散され、メディアの信憑性を加速度的に格下げしていく。かつては信じられたものは、もうどこにも存在していないのだ。だがそれを嘆くノスタルジアの感情もまた巧みに商品化され、観光の対象としてたちどころに消費されてしまう。

人間は人間以下のものになろうとしている。

わたしは憶おぼえている。かつて世界が一瞬だが善の方向へ、よくなるうとしてしていると信じられたときがあった。1990年代の初頭、ソ連が崩壊し、壁という壁が崩れ、冷戦体制が崩壊したときのことだ。日本は異常なまでの好景気に見舞われ、それが泡粒バブルのように消えていくことなど想像もできずにいた。

次々と思い出が蘇よみがえってくる。雑誌社の主催する年忘れ大パーティの最後に誰かが駆け込んできて、ベルリンの壁の破片を両手に掲げて披露した。たちまち拍手と喝采の声が挙がった。ゴルビーに今度のヴァレンタインのチョコレートを贈ろうと誰かがいいだし、その提案が全員一致で決議された。実はその年の初めには巨大な謎であった天皇が崩御し、民主主義と憲法を信奉すると宣言する皇太子が新しい天皇として即位していた。誰もがこれから世界は少しずつだが確実によくなっていくだろうという期待を、無邪気に抱いていた。

だがわたしたちは「わたしたちは」と、わたしはあえて複数で語ろう。何も知らなかった。何も気付いていなかったのだ。わたしたちが浮かれ騒いでいたときにもパレスチナは屈辱的な状況に置かれていたし、中国と北朝鮮では独裁政権が頑強に存在して、強固な抑圧社会を築き上げていた。やがてユーゴスラビアが分離独立を始め、民族浄化と称して虐殺と破壊が行なわれた。ルワンダでは民族対立による大虐殺がなされた。またナイジェリアでも。

世界はしだいに不寛容の相貌を見せ始め、原理主義者の横行を許すことになった。狂信的な

青年たちを乗せた飛行機がニューヨークの世界貿易センタービルに突入し、アメリカがその報復にアフガニスタンに、さらにイラクに爆撃と侵略を開始した。

日本はバブル経済の終焉しゆうえんを迎え、予期もしなかつた停滞に陥った。神戸で大震災が生じ、オウム真理教が地下鉄サリン事件を起こした。ここから日本の凋落が本格的に始まった。続く世代の若者には正規の就業が少しずつ困難となり、労働意欲を発揮する機会を奪われた。結婚をして家庭を設ける経済的余裕もままに、苛酷で不安定な労働を強いられた。

恋愛をするにはもはや心も体も、あまりに疲れきっていた。気が付くと、多くの女性が出産適齢期を通り越していた。

2010年代には、事態はどのように変化しただろうか。

2011年、巨大な地震が日本東北の太平洋岸沖で発生し、沿岸地域は予期せざる津波に襲われた。その煽りあおを受けて福島第一原子力発電所がメルトダウンを引き起こし、放射能が周辺地域に撒き散らかされた。これがこの10年の凶事まがことの始まりである。そして2010年代がまさに終わろうとする2020年、世界的に蔓延まんえんするCOVID-19（コロナウイルス病2019）が日本にも到来し、現在に至るまで人々を前例のない恐怖に陥れている。

ウイルス禍は単に病理学的な現象ではない。それは人間の自己同一性と相互信頼を破壊する

ばかりではない。意思疎通と公共圏の可能性を含め、従来の社会が前提としてきた社会的存在としての人間のあり方を、根底的に変えてしまう。日本の2010年代とは、大震災と原発事故に始まり、コロナウイルスで幕を閉じる（呪われた10年）である。

幕を閉じるだって？ いや、この表現は間違っている。福島原発もコロナも、いずれもが現時点では幕を閉じることなどできず、いたずらに手を拱こまねいている問題だからだ。

破壊された発電所に留とどまり続けるプルトニウムも、大気中に拡散して周囲を汚染するセシウムも、完全に除去することは困難であり、消滅どころか半減期を迎えるまでも気の遠くなるほどの時間を必要とする。ウイルスを地上から完全に撲滅することも同様に不可能である。日本政府はこのふたつの重大な事態に根本的解決策を示すことができない。事実を隠蔽するか、その場その場で応急処置を続けているばかりだ。

この10年の間に日本国家が終止符を打ったのは、わずかにふたつ。「平成」という年号とオウム真理教13人の処刑だけであった。もっともそれはいささかも真理の解明を意味しているわけではない。天皇制をめぐる本質的議論がほとんどなされないまま新天皇は即位し、その直前になされた麻原彰晃しやうかうの処刑は、この奇怪なカルト運動の本質を、永遠に解明できない謎に変えてしまった。

権力が行なったのは真理の封印とプロパガンダ言説の喧伝けんでんであった。原発はもはや完全に制

御され日本は安全を回復したという虚構の物語が広められ、日常生活のあらゆる側面においてソフトな監視がいつそう強化された。あらゆる「解決」は虚構である。2010年代の日本映画を代表しているのは、皮肉なことに庵野秀明のフィルム『シン・ゴジラ』であった。このフィルムではゴジラは殺害も排除もされない。ただ凍結されたまま、東京の中央に留まり続ける。それは現在の日本の根底にある解決不可能性の、巨大な隠喩になりおおせている。

日本をめぐる世界の情勢は、2010年代にどうなっただろうか。

日本政府はますますアメリカに屈従し、韓国との外交関係は史上最悪のものとなした。中国で、アメリカで、タイで、ロシアで、そして韓国で、政治の劣化が急速に進行し、政治家への道徳的信頼が消え失せようとしている。グローバリゼーションと世界観光地化が急速に伸展する一方で、コロナウイルスの蔓延がそれをたやすく打ち消してしまった。世界はふたたび差別と排除を旨とする卑小な部分へと分割され、あらゆる部分が偏狭なナショナリズムを声高に叫びつつ、絶望的な孤立に追いやられている。難民をめぐる人種差別が表面化し、誰もが非情な監視カメラのもとに囲い込まれることになった。例年のごとくに異常気象が発生すると同時に、人間による自然破壊と地球全体の温暖化が深刻な問題を引き起こしている。人間とは、スウィフトが喝破したように、大地の皮膚病である。きわめて大局的な視点を取るならば、コロナウ

イルスの蔓延を招いたのは、「狂牛病」という曖昧な名称のもとに騒ぎ立てた事件がそうであったように、本来人間が踏み入れてはならない自然を侵犯してしまったからだ。

もう一度、繰り返そう。人間はまさに人間以下のものになるうとしている。

紙媒体が忌避され、社会全体が電子メディアによって取って代われようとしている。誰もが口を揃えてそういつている。重要なのは情報であり、速度を伴った情報なのだという。

本当だろうか。加速されることで情報はますます起源が曖昧となり、その信憑性を確認することが困難になってしまう。声高々に叫ぶフェイクニュースが横行し、手作りの作業で獲得された真実が遅れて到来したときには、もう誰の注目をも惹かなくなっている。今日、人は、ほとんど無限に流れ込んでくる情報の一つひとつを、丹念に検討することなどしない。ただ情報を所有していることで得られる安心感だけを求めているのだ。

人は自分の信じるままに自分が自由な発言をし、周囲に向かって情報を発していると信じている。だがそれは幻想であって、誰もが同じことを、同じ口調で語っているにすぎない。いや、より正確にいうならば、語っているのではなく、何か見えない力によって語らされているだけにすぎないのだ。この愚劣さの構造をファシズムという。ファシズムは語ることを禁じたことなど一度もなかった。ただひたすらに同じことを語るように、人に命じてきたのである。

誰もが同じことを喋しゃべっている。それが正義だからだ。右も左もない。保守もリベラルもない。そして正義はつねに人を饒舌じょうぜつにさせる。それが多数派だからだ。正義に逆らって口を開くことは、絶対にしてはならない。そのような発言を口にする者がいたとしたら、その口を塞ぎ社会的に抹殺するのが、道徳的な務めである。以上が正義の典型的な言説だ。

正義を語ることはたやすい。なぜならば正義という名のステレオタイプは無料だからであり、いかなる自己犠牲も払うことなく、自分が道徳的に高い立場にあるという意思表示ができるからだ。

わたしは本書のなかで、できるかぎりこうした正義に抗あらがおうとしてきた。世界がまさに凋落のさなかにあるとき、誰もが同じことを口にするこの世界にあつて、たったひとり、異言を口にしようと試みてきた。

この10年間を、わたしは文字通り世界中を駆けめぐることでも過ごしてきた。台北で、ニューヨークで、ソウルで、北京ペキンで教鞭きょうべんを執り、イスタンプールからワガドウグーへ、さらにアンタナナリヴォにまで赴いて映画を語り、パリでドキュメンタリー映画の企画に携まなざわった。わたしを突き動かしていたのは、なんとか日本を外側から見たい、〈他者〉の眼差まなざしのもとに捉えておきたいという、抑えがたい衝動であつた。

それって、無意識的に亡命先を探しているということではないかな。わたしの年配の友人がそういったとき、わたしはふいに心中をいい当てられたような気持ちを抱いた。なるほど、そうなのかもしれない。わたしは気が付かぬうちに、この閉塞的な社会から脱出するという空想に囚とらわれていたのだ。そしてこの空想もまた、コロナウイルスの世界的蔓延によって、突然に断ち切られてしまった。

だが、いったいどこへ行こうというのか。日本を捨てて異国に赴いた瞬間から、わたしは日本という観念の、圧倒的な捕囚ほしゆうと化してしまうだろう。タルコフスキーがソ連から西側世界に脱出した後の苦悶くもんに満ちた物語を、卑小に模倣するばかりだろう。

本書は日本と世界をめぐる、わたしの観察日記である。今から長い歳月の後、わたしたちはこの10年を、どのような形で回想することになるだろうか。



この年は最初から不吉な予感がしていた。ラニーニャによる気候変動で、南半球のあちらこちらで大雨が降り、巨大な水害が発生していた。パキスタンで、エジプトで、イラクで、オスロで、モスクワで、原理主義者による自爆攻撃がますます頻繁となり、世界中で完全に安全な場所など、どこにも見当たらなくなった。

3月11日、マグニチュード9の地震が日本東北の太平洋岸沖で発生し、予期せざる巨大な津波が襲った。福島第一原子力発電所がその煽りを受けてメルトダウンを引き起こし、福島を中心に広範囲にわたって、現在にまで続く厄難をもたらした。チュニアでの食糧デモが契機となって、アラブ諸国では次々と反政府暴動が生じ、「アラブの春」と呼ばれた。エジプトのムバラク大統領からリビアのカダフィ大佐まで、長期にわたって独裁政治を続けてきた者たちが、その地位を奪われた。ミャンマーでも民政への移管が完了し、カストロがキューバ共産党第一書記を辞任した。アルカイダの最高指導者であるウスマ・ビンラディンが、パキスタンで銃撃戦の結果、射殺された。「ウォール街を占拠せよ」という呼びかけに応じ、世界のいたるところで「占拠」が実践された。米軍はイラクから撤退したが、現地の混乱はそれで解決されただけではなかった。日本では2000年あたりから少しずつ目立ってきた民族差別運動とそ

の言説が、インターネットの力を借りて急速に拡大し、「ネットウヨ」の名称のもとに跳梁することになった。

この年わたしは16年かけて翻訳した『パズリーニ詩集』を刊行すると、憑かれたかのように世界中の大学を駆け廻った。震災の2日後にロンドンに渡り、5月からはパリのムフタールに滞在。夏には北京の清華大学と泉州の華僑大学に招かれ、満洲国とシオニズムのプロパガンダ映像の比較という微妙な主題で、映画史の集中講義をした。その後ただちにパリに戻り、ウィーン大学に飛んだ。傷ましい気持ちを抱きながらも、日本にいたくなかったのだ。

## ロンドンの忍者

ロンドンには騒然としている。

昨年暮れに大学の学費が一挙に3倍に値上げされることになって、学生たちが一せいに反撥<sup>はんぱつ</sup>。ただちにデモが生じ、ウィリアム王子が乗っている車が襲撃された。実際このときには、車にゴミや汚物が投げられただけではない。後部のガラスが割られたりして大騒ぎだった。抗議運動がただちに暴力を誘発しかねない状況が現出しているのである。